

浮世絵師が描いた河口湖畔の風景

葛飾北斎の富嶽三十六景の謎を解く



葛飾北斎:甲州三坂水面 富嶽三十六景(1831~1833)

葛飾北斎と歌川広重
どこから描いたの?



歌川広重:甲斐御坂越 富士三十六景(1858)

定説ではいずれも旧御坂峠から描いたとされていますが、研究の結果、描いた場所の視点が特定されました。



新御坂トンネル
この上が旧御坂峠

実際に行ってみるとわかりますが、旧御坂峠から河口湖は半分しか見えませんし、鶴ノ島は見えません。また、様々な場面で食い違いがありますので、従来の通説は再構築する必要があります。
新御坂トンネルの上が江戸時代の旧御坂峠、天下茶屋のある旧御坂トンネル付近が新御坂峠。これは、自動車の登場で天下茶屋付近に道路が新しくできたため新御坂峠となり、その後現在の場所に新御坂トンネルができたため、呼び名が逆になっています。



甲州三坂水面の視点



長崎トンネル奥山(旧大石~河口道)



江戸時代再現、北斎の視点
特定方法は裏面



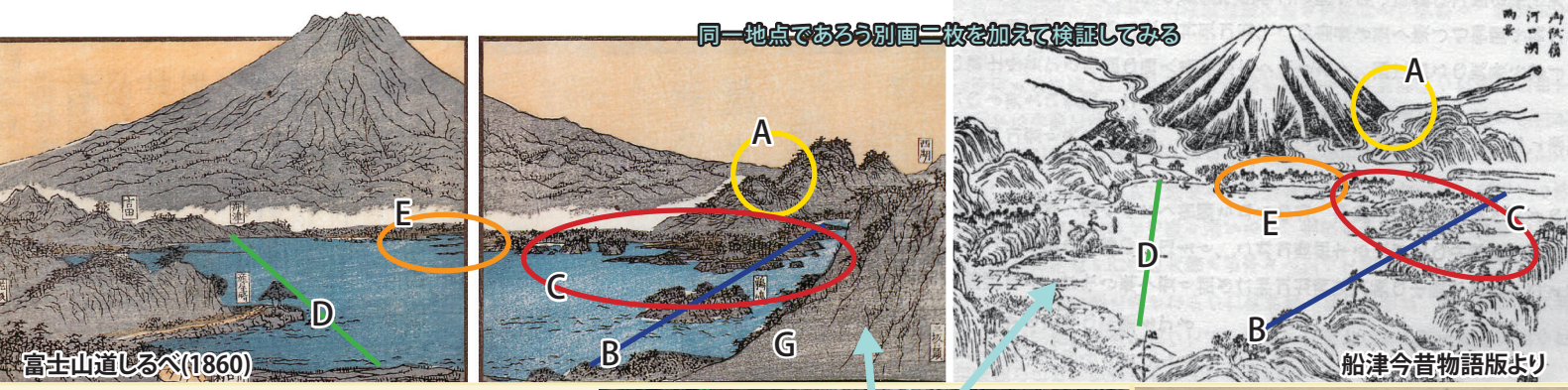
江戸時代再現、広重の視点
特定方法は裏面



北斎は留守ヶ岩~御室神社へ船で移動しながら描いているため、湖面に映る富士山は見る場所でズレていく。これが逆さ富士の謎解。

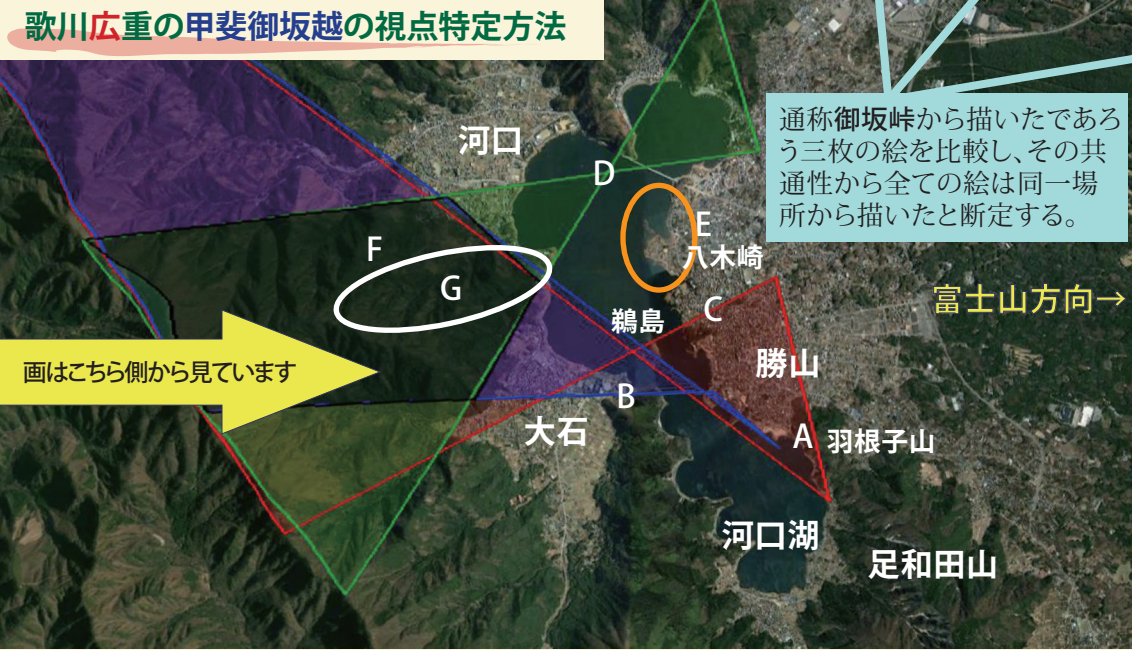


北斎の乗った船の航路 逆さ富士がズレている理由!



同一地点であろう別画三枚を加えて検証してみる

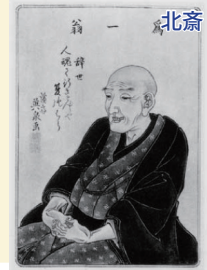
歌川広重の甲斐御坂越の視点特定方法



通称御坂峠から描いたであろう三枚の絵を比較し、その共通性から全ての絵は同一場所から描いたと断定する。



- A: 富士山の稜線が足和田山に掛かっていることから、標高の高い場所から見ているのでは無いとわかります。例えば、1,500mを超える御坂尾根から富士山の稜線を見ると足和田山より高いところを富士山の稜線が横切ることになります。つまり、足和田山と富士山の稜線の重なりを観察すると、どの高さから見た景色が判明します。しかし、Aのコブの様なものは足和田山の山頂に見えますが、遠く富士山の太室山の重なりの可能性もあります。よって、視点の高さは二つの候補が付きまといます。
- B: 青い線のように特徴が並んで見える視点位置のエリアを地図にプロットします。
- C: 赤い領域のように見える視点位置のエリアを地図にプロットします。
- D: 緑色の線のように特徴が並んで見える視点位置のエリアを地図にプロットします。
- E: オレンジの領域は現在の八木崎だと推定し、エリアを地図にプロットします。
- F: 白丸のエリアが上記A~Eの共通部分で、この範囲に甲斐御坂越の視点があると推定できます。
- G: 絵にある丘か崖のような景色を意識して今回新発見の視点を現地を確認しました。



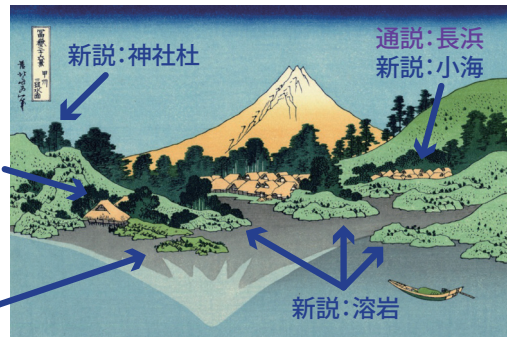
葛飾北斎の甲州三坂水面の視点特定方法

NHK番組にて発表した「凱風快晴」に続き新発見となります



北斎の三坂水面は上記の御坂峠の考察に当てはまりません。どうやら、もっと里に近い場所で描いているようです。そこで、同じ北斎の別絵から考察します。この画は「北斎漫画」に収められており、三坂水面の元画になったと言われている絵です(左絵)。いかがでしょうか？
 地元なら勝山沖合から描いていると見えませんか？
 実は船に乗りながら富士ビュー沖(留守ヶ岩)から御室神社に向かってスケッチをすると左絵のように描けます。逆さ富士は移動しながら描くとスケッチ場所の違いで北斎画のように上下でズレが生じます。
 そして、いままで鶴ノ島に思われていた島はシッコゴ公園沖の溶岩の一部が湖から露出したものに間違いないありません。葛飾北斎は勝山湖畔沖のほんの近くで甲州三坂水面を描いていたこととなります。

二百年間、御坂峠だと思われてきた浮世絵はもっと、ずっと、里に近いところで描かれていた。



富士五湖ドットTV
 Fujigoko.TV
<https://www.fujigoko.tv/>
 他の北斎視点詳細はこちらから。
 記:久保寛